



13
3084
2止

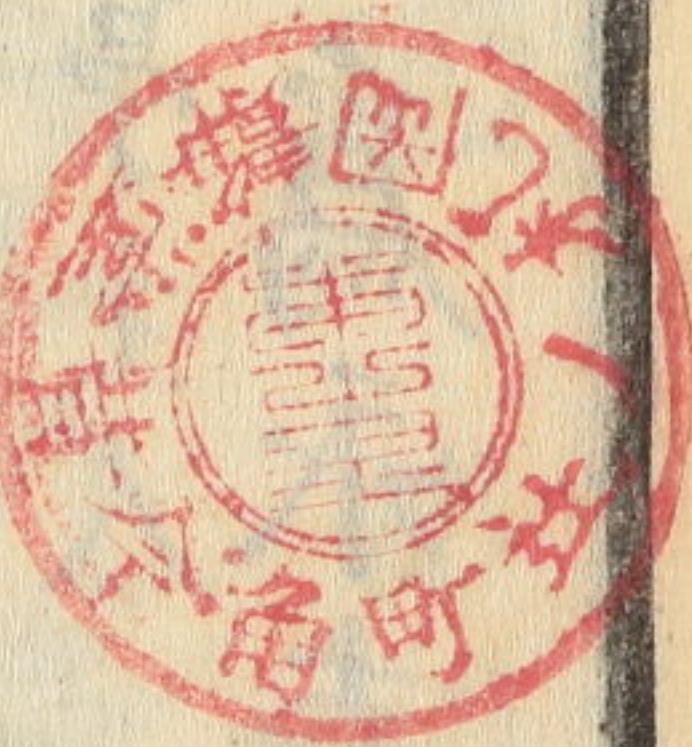


門 へ 13
 3084
 卷 2

昭和十年
 六月二十四日
 購

應喜名久舎後編

口演



大目富本豊前探の正本は名酒盛色中汲とい
 る、狂言作者瀬川如皋が述作しく市川門之助
 瀬川菊之丞の大當り菊幸助の狂言を後とれよ
 よふのありとを日書林連玉堂主人予が草十の
 喜信て此草紙の抜合補綴を於れ九月を陽
 菊の足印のあとをみるよりのくその日残るの本

多小志のぎ重陽言愈弄名久舎とあつてか
菊助の貞節実情を死守せしが恋情とく人挫
き文を綴りて世小弘めが幸ひよお娘はさあ方の清
きよ時ひ后編を待せぬのよりこれありまう元稿の
よろしたと澁川如泉は尚り狂言の巻とありひあふ
んと彼津路裡の妙章とくふうつて序文不換も是

江戸作者 狂訓亭主人
為永春水誌る

お菊 名酒盛色中波

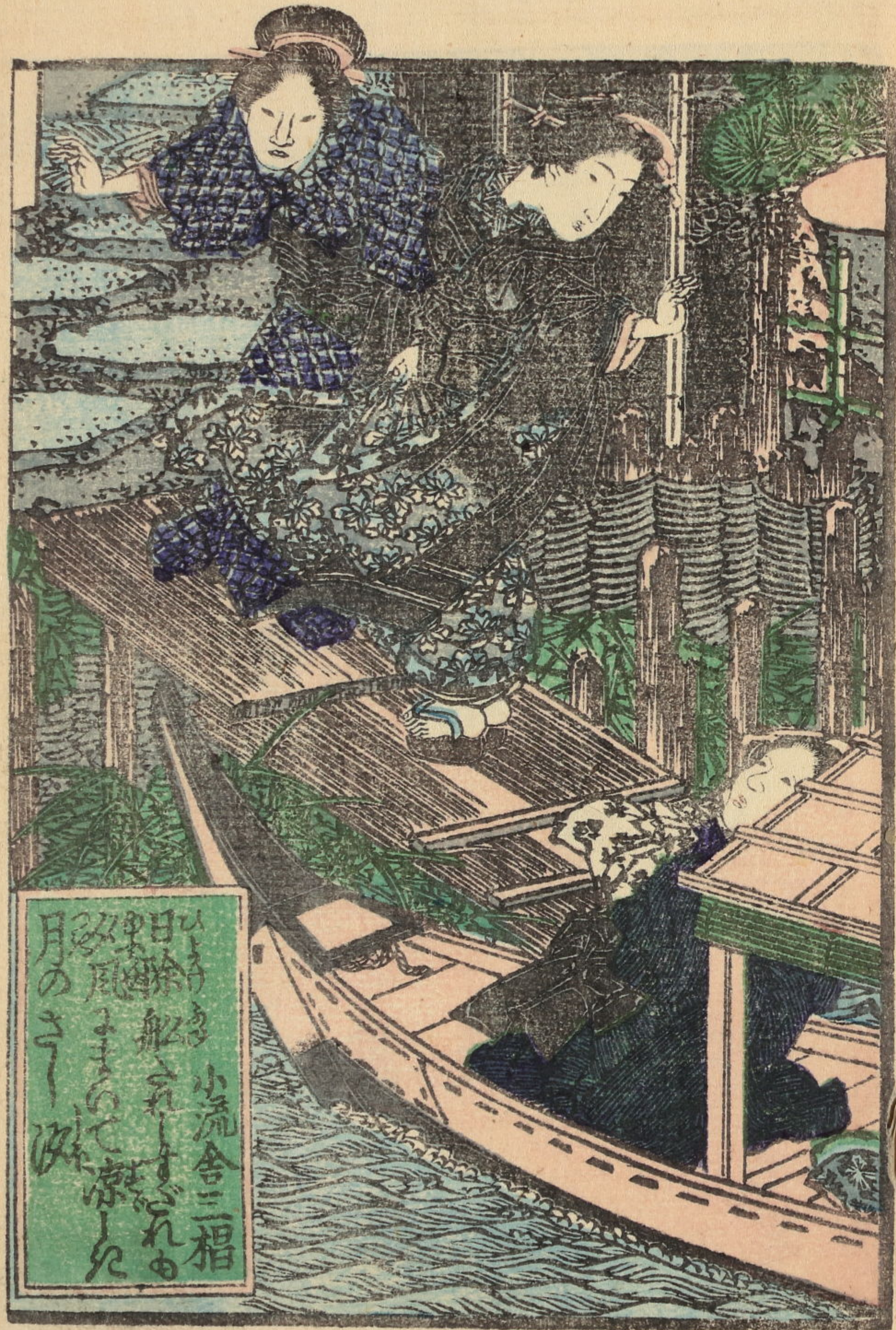
澁川如泉述作

あがひのきつらあつてはこれけあの今を
くめまがたお菊はしらなごころと乳菊乃菊人
我うのあひびあつては菊もあつては菊
まもる菊ののびのち菊お菊のち菊
しるは菊のあつては菊のあつては菊

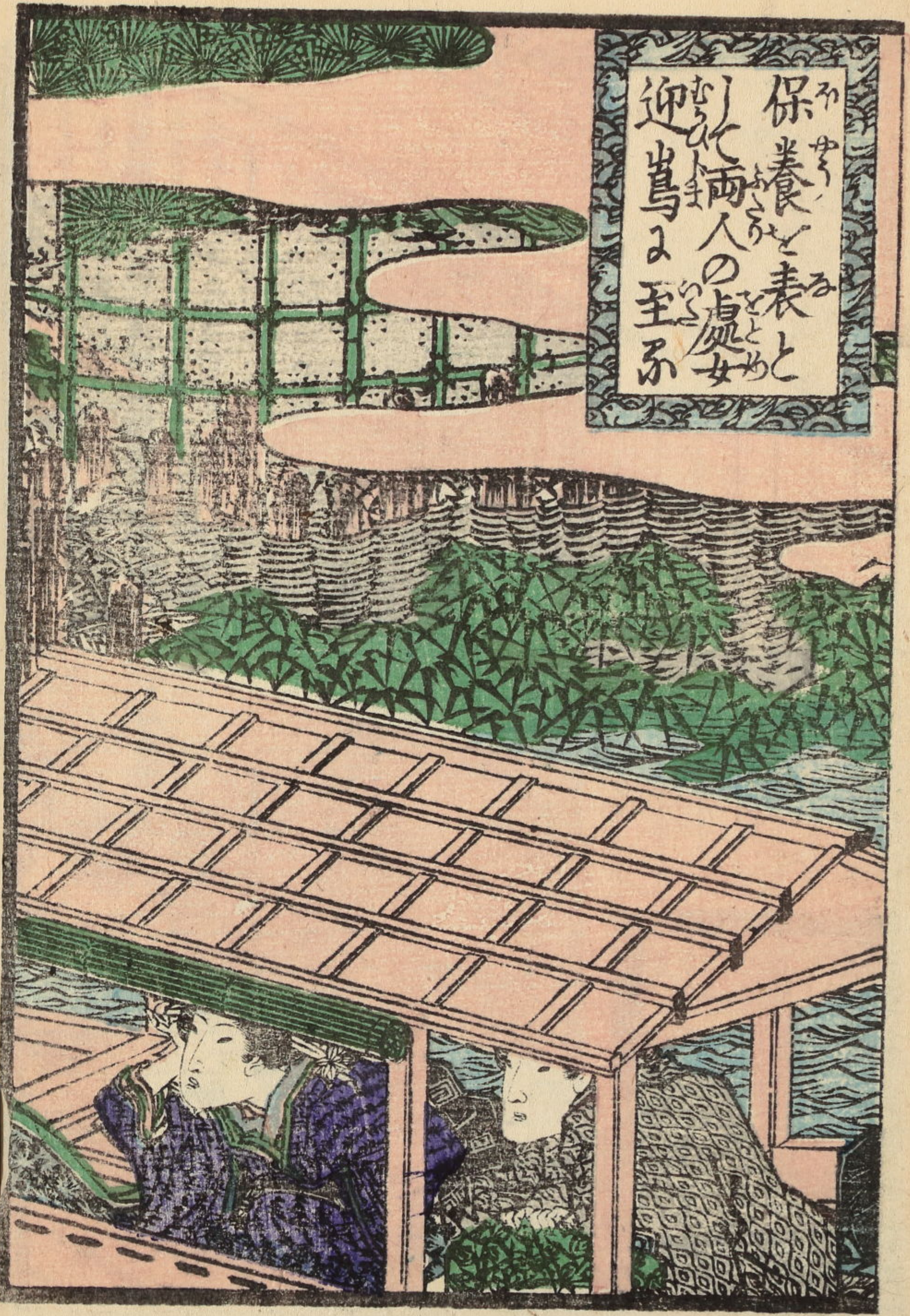


誠と感情と
美女のいとひ





小流舎三摺
 日餘船をいするれゆ
 月風まゝのて涼しん
 月のさしけ



保養と表と
 迎へて二人の處と
 迎へて二人の處と
 迎へて二人の處と

復葉也

心月も

めさす

たは

いけ

あたる



五代目瀨川路考

野勝 嘉言

應喜名久舎 四の巻

江戸 狂訓亭主人補終

第七回

名もおそろし死蛇が谷真蛇長松の路次はまあや死
玄関竹格子肉よありー秘密の神殿光り赫く約
の殿もろく来く名札を飾りまらトやくトうまづ死く
案内とよ宝屋の偽助ハ玄関小鵬を拭一ハチトお釈
中ませし寂實院さあハ在在宿でござりまらう一とよ

の守が元祖とありのせえとあらうたうことあるべし悔
一涙の胸の中あつたどおれあひらりさればおあ
その年も暮るく大和の春とあり既よか菊
十七日ゆく病業由大方るをりければおれ
上は細ののあつておるより一月はより一
人せ初らる元二つとあり佑助の大痛とあり
後家のお後八日毎の又菊日晴下よりの
直夜看病よりけり佑助も女房も一後家と女

房とおもふ系をいふあつく今宵も泊りて佑助の例本
け家れお六つとありとありもお後家あつたお菊
何り用ありそふお孝助を佑助の風邪とあり
こを居より一が奥(あ)お乳母のそととあり
さんよでございませぬか菊さんがいらそお案下
てあざいませぬそれよけりか陽をぬいたとあり
桂さんお度々したる随分かつひるされてお
ありぬいませぬお菊さんお孝助お歩みければ

いとあらうやむらうそれでおまじやふ上まうとふ口よく
お出るまうくかまきの毒るそこの風がむたりまふトみ
とみでお菊がそを(連てゆくお菊へあつては笑ひま
かゝ一幸助おらうよひかへんぞお冷やでまひうおま
まの上りれるる工一十二布んのと有り風でモウ結ぶといま
まか湯がめくそとる工一アイぶを「おむ指がよふか
はるひるふまう一どより私がか医者の中うごうか乳母
えん不毛くモウか医師さぬよりありごこのお乳でた

トのく且那さぬと一人お助けやこの井あまのくそ乳
まう何でもお菊おまうなばつらいつく今朝の琉球辛
のちとこえはまあはま一の井一そしとお湯へくま
まう「ハイお湯へつらいつく中へくゆあみんるをいれま
しとトこれよりお菊を風呂へいれるまを湯へくあがれ
乳母ハお助ふ向ひ「今宵のゆらりとお母一ま
今お菊えんとあまのえをありて上方へト次へゆく
お菊へめくは家といで「八月顔とるまをむりつれ

味かうらゐいトせんぢやう仙女香あけの白粉しろとあせきその切きはけて自
せうくと元来もとよりの美人びとんその上うへ久ひさくる花はなの目めもめぬ
まま類るいの白しろ死しよよ仙せん女ぢやう香かうの艶つやももううららうう死しととううああ
ののちちくく香かうみみののちちろろくくををききううちち菊きくさんさんアアイイアアイイアアイイアアイイ
ちちりりとと流ながるる上うへアアイイ一ひと夫つまのの嬌うれ一ひと是これううららままををせせせせととささ
んんとと市いち夫つまぬぬままししととおお花はなさんさんののかか妻つまととししてて一ひとののああままとと
むむろろりり一ひとそれそれでもでも丸まるでで引ひ放なせせももおお花はなさんさんががかかららののととああ
イイちちくくととんんままとと下したややアアままののヨヨ私わたしハハ一ひと生せいままししてて居おるるとと言いふふ

「ととううししくくととんんままととううくく一ひとのの娘むすめとと申まをすすああららくくトトととああるる
ままるるののつつ先せん一ひとととんんままととううくく一ひとのの只ただああくくののああららままししととんんがが
つつるるけけののややアアままののままししててももああままのの好すままとと夫おつつぬぬおお
ししてて上あののヨヨめめくくととんんままととううくく一ひとのの身みふふううええててああららままししととんんままととううくく
いいらられれててせせ見みふふ一ひとたたれれららああららままししととんんままととううくく一ひとののひひららままししととんんままととううくく
そそののおお自みづか身みとと陽ひかりにに其その次つぎ女むすめはは赤あか地ぢのの縮ちぢ緬めん（あか其その装ま菊きく）いろ色いろ
深ふかみみせせ一ひと中ちゆう飛とかかたたらら緒いと緬めんのの肌かわもものの身みははけけくく
ままととののおお自みづか身みががままるるととんんままととううくく一ひとのの山やまもも縮ちぢ緬めんのの

のまごたは髪くもの少すく一ひと見みをゆめ一ひといてふ留とどる色いろ宿とどの
されをうけ枝えだ菊きくの付つ一ひと敷ふ亀かめ甲か比ひ并ならを中ちゆうへさ湯ゆより
ゆく眼めのちちがまご一ひと様さま色いろ小ちひあり一ひと姿すがた叔しやく父ふ坊ぼくを
かろふ歎なげ迦かゆれ子こゆよを流ながまへきと哭な一ひとさ幸さい助すけの
ゆよのち一ひと責せせめを落おしうらりとててんこれか
を去いふゆと業ごを取とり一ひと大だい恩おんのある主人しゆうじんの遺い見けん今いま迄
尺せきせ一ひと忠ちゆう爰えんもほれと西せい多たの凍こ切せつとらられてハ海うみだど心
でゆよ見けん一ひとも見けんれがとる能よ也やゆら一ひととさ幸さい助すけの魂たま

うらまゆふるゆあゆらとく次つぎの乃なゆんときれが菊きく
ハあま一ひと幸さい助すけまろてあくれハ一ひと見けんんをどううら
ト貞まとてうらハ何なにゆ小せう指さしの用ようがるゆあゆらとく
らア子こトハ一ひと乳う母ぼハ玉たま子こ甚しん高かうまをとらて来きり
一ひと幸さい助すけさんかきうらととそんドとあつらて来きり
うら菊きくさんゆああがり一ひとアイト一ひと西せい多た喰くふのう候うそふ
る一ひとア一ひと菊きくさんゆあまごかそはいつらうらゆれよゆり
湯ゆでもゆあゆれ折せ角かく比ひ位ゐハ一ひと候うあるゆらトいられて

お菊の幸助あざむきの「アイそよの」ませう「らんまを
くまゆとト次（白くお菊の何ういそくして「まあつら
るまの」一禪でござんせん「アおご」ヨ「勿辨るい今ふ
たれを「ありませう」一まんごと中スと勿辨るいのまんのと
ぶよお猪仕がしとまのいあ「かくとまうまう」帰のまが
トつらとあは乳母のまゆと酒のめん骨のまどろく
のちあつら幸助ふこれとをめあまうくあつて「ア
酔ま」一「は勢ひふあせのませう」マア結でらゐの豆乳

母や幸助ふお義免とらとてあけくおれヨ「ハイルト
墓子の所（約さ）んがの幸助も腰が抜まうひさうけ
お菊が浦島のそをへごうとあ「活ひ」一「ホニ」命むらひ
とるまらごねエその美しめいりふおまへさんと「隠よ森
羅王の「不」連てりれる所「さけまう」一「陥魔さるも惚
て女「房」ふあうと「いふごう」ふ「よくりる」るあ「り」ふ「り」を
「おまへ」と「お徳」知のお娘「れ」さんや何々惚て「まを」お「の」ま
「ご」ご「の」ま「せう」一「い」く「よ」ご「う」を「た」れ「が」や「れ」る「の」ら「一」それ「ご」も

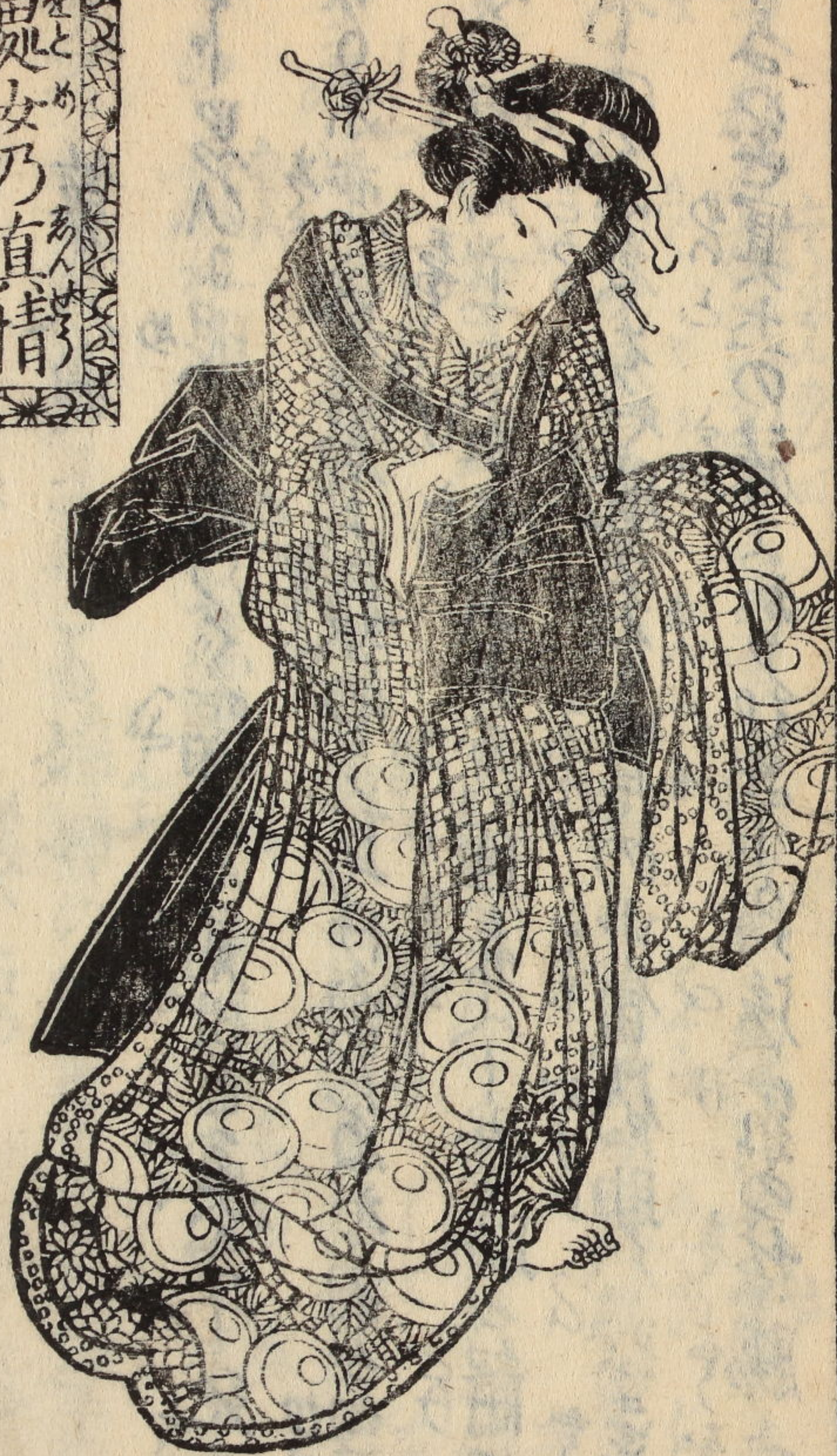
森下川の女身元は海く惚このがあるそとてうらお嬢
くらふ一たと何があることとおま人のちうまもらうのあ方
とらゆでもあられる身でる一たやく死んで今度の世お
いごこのお大名おでもおれまうくおれ自由お一とあは
や一おれとエ一それでお一そのあ方いさそおま一うら
一たまおサ一のいのがその娘が大痛をがうくあつた
あが苦勞とよく樂一そとあ大名のあ殿さあとおの
やうら浦山一お身の入と酒がらける日頃のほろあ

菊の毒もはるぬあつてく一とく一まんむの身おあえを
えうう徳がよ一あことおのひ一とく一あことおのひ
あがおえああるまが油敷うらああがあるとあくとさあ
嬢一そあまお返事を虫てお出づうう病業あがらあ毒ご
らうと苦勞おまるも馬鹿々々一んがなせう世活のや死て
おはまうぬ身のう入サトらられてお菊を泪ぐと一そのあ
る壺裡なるりやりとけとまるものは惜一んつとく一ああれま
色の意のとらふはあぶるものう知とませんのおあれら

「若殿さあゆい惚へのま」イ、エ「それでもおれつくと
あつやあつやのま」それの子「それのまをりおれへのま」
くらん「惚へのま」それのまをりおれへのま「サモウヤキ
まをそのまをりおれへのま」ナセそんなことおれひげね
何と申せよんから私おれおれへト泣出まこれおれの人
情あつやあつやのま「口でひらひらおれま仕うちでひげねま
いと初おれにひらひらおれま守おれへのまおれへのま助も
あつやあつやのまおれへのまおれへのまおれへのまおれへのま

「さあゆい川おれあつやあつやのま」顔「おれおれおれおれおれ
まおれあつやあつやのまおれへのまおれへのまおれへのま
「それでもおれまからひらひらおれへのまおれへのまおれへのま
まを「ナセエのま」おれあつやあつやのま「おれまをりおれへのま」
色でひらひらおれま「イ、エ」おれへのまおれへのまおれへのま
まをりおれへのまおれへのまおれへのまおれへのまおれへのま
おれへのまおれへのまおれへのまおれへのまおれへのま
おれへのまおれへのまおれへのまおれへのまおれへのま

心を湯む
 義漢の
 直情
 女乃
 處女



我恋草子
 道色
 教乃
 母乃
 志はくくく
 心はくくく
 くれ

彫耕庵

假名未成



（おかしんがうれてえこのめとたつこ）言ひま由おのひ
きろくろをぶくさりぬいらふよまもるけぞ

第八回

あるド思ひも眼もあつて隔る見世と契ぎり死心
はるふ恋へも糸と娘のちちつけぬらぬお菊が四月
のやま男ハ主と家来とと弐理弁へ一孝助が解ぬ
縁一の糸夜を脱ぐる四月の中旬仍助ハ終つて善
生るるむ冥土の縁よありむき一六後家の終腸大

方るねど相送れぬ由あつれば何ふはけ七尋ねれ
一今もお菊が味方る信玄湯と幸助が身代の死
孝助りにも出されぬ有さぬよむぐり死ことのもるれど仍
すけ一に帳合まれば七尋ねぬ仍助が私欲の引
むりあを散れ一入信玄湯と幸助が毎日契へ来る
あふづつともりられむされども婦婦の毎と一七身づ
るまよく美しければまを知らぬ人々の心をやまらぬ女由
その他も自惚りてまこ幸助は持ちけりやう一死風情

幸助はうらやかく思ひ中の間よりあくへに至るぬゆゑか菊
の火ひまく顔かほをえるともあるぬゆゑ案あんトらせしあるぬゆゑ隣りん
寤うせさらぬ娘の浄きよまり耳みみを志しとせよく咳せきバか菊きくの
ねやとあつひ踏ふの傍かたはらぬか平へい一ひと裏うらづつてう浄きよまり
紫むらさ鳥とりのさか中なかはつまむはちの後のちかむさおけつけつは
おまぬすの風かぜ本もともあつもの一ひと時ときめとあつぬつひ
由よしのふ縁ゆかりむのあはげあはれ我われらげおあはげあつたれのこの名な
をうさふ浄きよ猫ねこ理りの色いろの中なかぬるうくよあであつめとあ

えより今いま習ならふ由よしたたらら中の間まと人ひと目めと志しのふ庭にわづいひと
と撮えんより幸助さうすけの後のちあつりてあつどのをこらのの志しぬぬはあは
て眼めをかえは笑わらうは志しのふ庭にわづいひと志しぬぬはあは
て後のちを向むかへて肝かんを渡わたへしお菊きくさんさんをり知しれらる
と何なにふか志しぬぬはあはけお菊きくさんさんをり知しれらるぬはあはけお菊きく
か一ひとまごお母ははさんさんをり知しれらるぬはあはけお菊きくさんさんをり知しれらるぬ
はろくろあはるあはけお菊きくさんさんをり知しれらるぬはあはけお菊きくさんさんをり知しれらるぬ
かろのこの何なにがかえ一ひとまごお菊きくさんさんをり知しれらるぬはあはけお菊きくさんさんをり知しれらるぬ

私が養ふゆゑのめづりやくせんまごの乳母も養ひ
下すけしうけにやせむでさうのかぞとてヤスくうひあこ
おれしひでのききあつてさうとせひまうてかよすあひ
し一^津空の中あつた子そしてこれハエト親指をえ
せ一^津今めでた慈次郎さんとせしと一^津をやくあま
さんお出あせ一^津よく邪なふおごのふ一^津あまあま一
あながあまごつたえあいと赤熊さんごつとたてヨ^津ア
一^津今あゆあん礼ごうをやくとは一^津約そ下^津極首古を

しとかうひとつられてあつた娘まのりやそふり一^津赤
顔一^津よく外の人とまぬぬあつたませんてゆめく
のちうるものふかまあつたあつたあつたあつたあつたあ
まさん姉ああり一^津妹あつたあつたあつたあつたあ
て朝夕お例も居て着たせとあつたあつたあつたあつたあ
あの一^津あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
でござんすまのりゆ信を傷やおま一^津がそんるお涙でも
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

かき入さんあやの傍あやりあや一あや二あや三あやの中あやにおまへさんあやがめいより
くつてさるあな傍あやのとめいりあやと六あや大遠あやどね工あや一あや二あや工あやあま
へのかさりとあやのふの六あや嘘あやとてくあやれ傍あやいとヤスのあやのにおまへか
乗あやばさるいりつかさいさがまぶさく傍あやいとヤスのサトあやのふ所あや
あや（後家のあまがまる由あ一あやアレかめさんあやのおまへとてややく
あやあつくととりつれくおまへまぶさくと撮あやよりあや庭あやのあや飛あや石あやへ
あやあつくととりつれくおまへまぶさくと撮あやよりあや庭あやのあや飛あや石あやへ
結あやぶあやのあやあひあや男あやの方あやとてさるあやりてさるあやりたあや女あやのあやあひ
身あや

らあやきあやはあやああやらあやらあや幸助あやがあや恨あや合あややめあやくあや公あやのあやうちあや一あや二あや困あや
ああやくあやああやひあやまあやらあやふあやとあやむあやらあやとあや耐あやくあやああやんあやらあややあやらあやひあやをあやらあやふあや
まあやこあやああやのあややあやらあやふあやんあや女あやとあやるあやとあや眼あやのあや毒あやであや急あやれあやらあやれるあやああや
おあややあやアあやねあやへあや困あやつあやとあやふあやごあやとあやアあやこれあやをあやかあやりあやふあや昔あやくあやるあや思あや案あやの
外あやとあやのあやふあやけれあやとあやたあやとあや思あや案あやがあやああやればあやとあやしあや度あやおあやはあやがあや長
右あや玉あや門あやとあや恋あやおあや申あやするあや状あやさあやえあやああやればあやとあやああやひあやまあやであやれるあやのあや
うあや赤あやのあや冠あや美あや由あや世あやのあや美あや理あやゆあやつあやたあやまあやるあや不あやとあやのあややあやまあやしあやふあや
深あやくあやるあや方あやのあやがあや急あやのあや癖あや時あや日あや八あや人あやとあや笑あやふあやてもあや今あや日あやのあや急あや身あや

と引くる色の浮世のなびむひたなく迷ひなきと来
 るのりそとやくむこ聾耳と定めくまらるるさうまのひ切申もある
 ごろの孝まことひ徳次とくじ糸いとどのと聾耳むこよ志こころなる成なり新造しんぞうの公こうを
 休やすめるも家いへのためであうそふく仕し舞ま六むト親おや身を
 慎しんむ胸むね兼かね用もち世よあめりづる一ひと社やしろ年としなり

翁判四の巻

怪談 小夜法師雨

狂訓亭 爲水作
 柳畑亭 國直画

むし娘むしむすめのりけりのりのたまぶのたまかろりかろりが美目みめよよはは累かさねはは世よとと来きり
 上うへりりの雲くもはは怪あやししいいとと思おもひひててささるるぐぐ久くくくとと胎はらははたたのの籠かごに
 朝あさももりり再また々また方かた用もち性せいははああるる縁ゆかり紀きとと備ひかかるる城しろ合あ合あ金かねのの籠かごに
 小舟こぶねををかかりりてて三さん矢や握にぎ裡ら家いえのの素す直ちか宿しゆくにに化くわ成なりてて悪あく工くをを文ぶん金かねににお
 寄よるるとと世よをを又また又また交まじ横よこ櫛くしのの名な込こかかたたをを強つよ欲よくをを身みにに是こゝれれのの味あじのの
 小こなな目めととののりりててかかぶぶののああままううちちのの火ひののええききのの蚊かのの損こ傷がらのの損こ傷がらとと約やくととせせるる
 ののがが色いろ仕し掛かくくててババ忽とああそそろろ一ひと丸まる杖つゑ 湖うみ果みのの小こ舟ぶねややああととななららぬ
 佛ほとけ智ち力りきのの表あはれれをを求もとめめてて縁ゆかり糸いとのの如ごとくくはは向むかひひのの水みづのの草くさのの露つゆ消きへへててななららぬ
 るる見み悪あく人ひとああれれがが善ぜん人ひと業わざのの春はるのの野ののの若わか者ものまま古ふる跡あとのの一ひと糸いとははななりり

重陽 應喜名久舎 五の巻

江戸 狂訓亭主人補

第九回

さこの宝屋の後家お猿ハ偽助が在り時よ
助の男風俗ふ公と初折ぐは風情
みぐろ口説よれども男ハ一向小合ざり一が此首
物が元後の物々幸助とハ
とは問いろくまきとのむやい

美事とお前公の七さぶら後家と偽之由せせ
折る身でる元来まこの美一けれハ色香の
由喜花るくは柔スス不美のねまは海
由折るく會状ハお猿ハの公とあやま
くまきひけがハ美ハ幸助の公と知らハ情
そのわけ身が子供の中るれハかりら
お猿とたのむ幸もやあうんとうたがハ
やうと幸助とまろく例引つげぐる風情

これが病の種とるゝ氣がやへ引込病氣のようこそ人
由も違ひ食ひの由薄くぬ程なれば乳母ハ大さきまがら
きりよく医者よえせし所さして藤治のむぐりたる
ひまけれど保身書とさせし物事由ききぬせよせよこれ
勞慮よまご下成文物見托山して氣の結がれぬ
中ふまらうより一業と多く呑こも家内よのこころよく
して居て六病なきの作らんとせしといれける乳母
ハお菊は托系とまきせし由も只いやくと困るゝとの屋

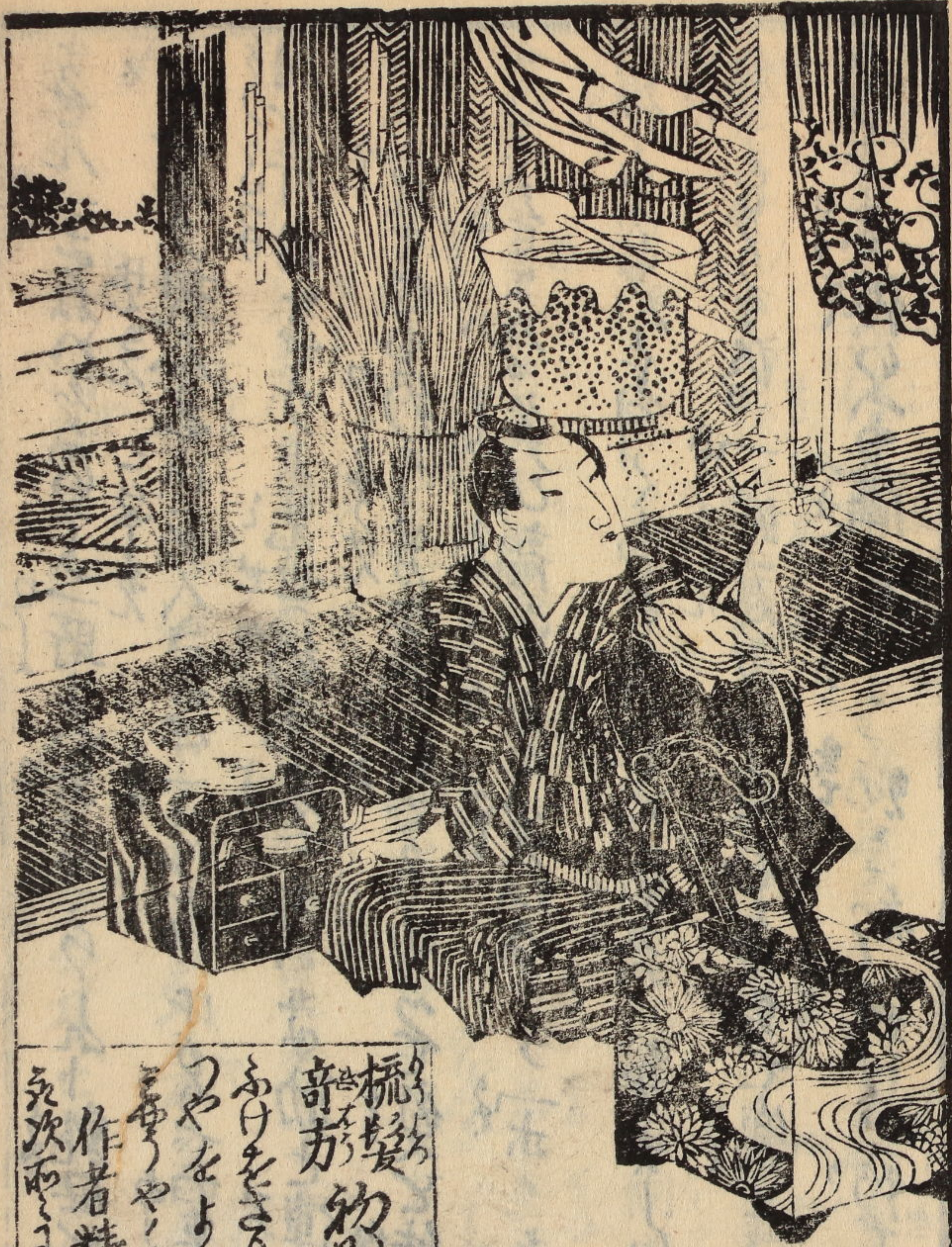
方所へ支配人信玄湯お菊が例へ申さるゝ一お菊さん
まづこのめどやナとの容よふさといやおおをいひるらんを私
お菊の奴と孫お菊の由後なるさぬまきりおてんをみる風
由引いおませぬモウかまよ由婚社がまどめでいひる色
幸でてもまらるゝ女郎買よでも約りあされがけトおけけ
堅は老年代言まお菊ハありと一もくともい信
玄はとねエ女が女は四買よ約りあし一信
由私の托る老奴でもみるまき晴し小菊ありまらるゝ

くるえびアゴどもりの連者ごころ藝者や女郎か惚て
まのまのまの「オホくく」をこる工「信」娘よしく娘よを
つくれるの内せがかま人が連中してそくそまへ途中
で酒小酔倒れて志まうて色男は逢してれるのとや
てくうささんあとどやアね工「オト」それどやアかまか
色男の「信」あさ死よされるもやのなり色サ馬麻ふる
ので世の中い面白いのもの理結でなるりやると余がわく
まるるんおサチのトまををけくくるさんかまへい後の惣

傾で大目のれ身ご長生をまねトやアるるの「イヤそれの
か何う用が有て来さッけラそれくア奴が子お花グマおま
へと舟で向嶋へ誘引といとやとよと「ヨ」ハイそれの
有ぐふ事いふけれとぶも病業のつるいの「信」一出あるい
も「信」合ごト工所へ幸助が来るると信去清ハ「信」イチお
やる今日も暑うろこね工「信」明日のおや「信」きの用いご
「信」昨日の何も「信」そんなら「信」苦勞でもお頼があるが「信」
何でがぶるまら「信」あ「信」さ「信」お菊さんとお花をつれく

舟へ行くえんせんどもお花が子供同前お菊さんが病
 人ごう他の者で不安堪るるえんせひくおれごそのうら
 舟も向嶋もお花が一人でかるとサ私が一所へ行くと
 云らにお祖父さんにお寺ありのお出ませんと大さお世
 活るは方のせご新造を買く客色おでもあるを居
 のおくくトお笑ひお菊ハ御お焼くお焼ありのむ
 床と服へよせ一まぐ一夏のやうな心持ご幸助おまお出
 信一上幸助がらやごとくても無理にお供や頼ま一随

分一お一それおエうれ
 信二お菊さん
 信三お菊さん
 信四お菊さん
 信五お菊さん
 信六お菊さん
 信七お菊さん
 信八お菊さん
 信九お菊さん
 信十お菊さん
 信十一お菊さん
 信十二お菊さん
 信十三お菊さん
 信十四お菊さん
 信十五お菊さん
 信十六お菊さん
 信十七お菊さん
 信十八お菊さん
 信十九お菊さん
 信二十お菊さん



梳髮 初めより
 奇が 作者精製
 あけをさうりあまの
 つやをよくはる
 髪やうらやま
 気次雨くまあり



病婦 喜情
 小よろて
 愁ひを忘る

ませんま一まねいまあままいまくま一ま野まよまおま出まヨまめまくらまふまトま乳ま母まとまたまく
「あまままりま現ま金まをま出ま病ま人まさまあまとま下まレまそのま中まのまりまでま羽ま立ま」乃
用まセま斤まのま生まをまうまトま見ま世まへま約ま元ま来まおま菊まのま母ま助まとま連ま立まと
るまうま肩まままもまゆまりま第まのま末ま二ま時またまりまのまゆまりま七ま時まとま結ませ
やまうまくま毒ま入まるま笑まひま顔ま乳ま母まもま笑まひまるまうま「ホまとまあまるま」
いま物まもまうまもまかまとまうまくまあまさまるまけまれまとまおま髪まのまかまゆまままいまあまち
私まもまとまままうまままいまヨま「堪ま忍まがまヨまそのまゆまりまあま七ま樂まとまさま存ま心ま
うまトま糸ま俵まのまもま隔まるま見ま「うま短まとま知まらまれまけまりまゆまりまてまその

翌ま日まとまるまれまバま信ま玄ま湯まがまたまうまひまゆまりま菊まのま病ま案まとま保ま
ままさませんまのま孫ま娘まおま花まおまさまそまらませまるま舟ま屋まにま後ま家まのま浦ま
山ま一まくまいまままくまくま思まへまとま出ま見ませまのまあまるまままいまれまバま同ま道まとま申ま
いまれまどまきまをまのまりま中まにまやまおま花まハま菊まがま旁ま一まのま女ま之ま四ま人ま
つまれまてま米ま町まとま立ま出ま花ま水ま橋まのま船ま宿まにまりま乗ま出ましま孫まをまうま
舟ま川ま戸まのま川ま岸まにま舟まをま付まさせま大ま江ま樓まめてまままくま春まのま全ま
まませま孝ま助まハま小ま僧まをま咄まびま一ま長ま吉まやま自まりま爰まうま今ま道ま一ま
りまてまナま茶ま利ま屋まとませんまとまあまらまとまおま出まるませまとまそまよまめまてま来ま

ゆゑにアしおんまふちやくしておんまふ男とのゆ
のハナセののちうごらうね工若且那が丁度あんるまくい工
をくりでござんませア工モウその内由幸助ハ控りて
みんものヤスあふ茶中てさるなりさり合せせんヨト宗
風情々船の中のかうまお菊ハ泳ぐ幸助とあふある
さる幸助もか菊がゆりゆらあはと利発お花ハ兼こ
よりのくあふんと雅量して今日の原も任せしるる糸
身のうふ引く人美理あはせ七とのゆけゆのれがせひ

か菊も幸助とあはれ持その身をあふるやまくせんとおひ
一尊さんモウ藝者ハお菊ナ是ううあふこのと能て原
をながう心せひ多く帰りてこののね工一と入るるさあ
しんせうト茶利と始藝者あは皆々後髪とせう
久しけるが女どもハ浴らば湯ホ入りぬるハか菊かまき
助と只三人とある今日か菊が衣裳ハ柳葉の結子黒
糸の多のありのと後一様よりゆき糸ハ生紹の巾度
黄紹の長襦袢此糸と浅黄の結ひら小心の帯出せ

風小結（ち）ひりー島田留日（ち）以（い）百倍（ひゃく）の美（み）一（いち）さか花ハ（は）後（ご）鹿（か）
の紹（じょう）小（せう）白（はく）のつ（つ）さね梅（ばい）卓（たく）茶（ちや）のつ（つ）る天（てん）の（の）帯（おび）お菊（きく）あハ（は）心（こ）
す（す）の仇（あか）のあ（あ）て滅（めつ）小（せう）碎（さい）す（す）こま（こ）こ（こ）一（いち）晝（ひる）寐（み）が（が）あ（あ）え（え）
あ（あ）う（う）ど（ど）雷（らい）さ（さ）ぬ（ぬ）が（が）あ（あ）ら（ら）う（う）え（え）け（け）り（り）や（や）ア（ア）ト（ト）あ（あ）ん（ん）が（が）ね（ね）エ（エ）ナ（ナ）ニ（ニ）ウ（ウ）リ（リ）日（日）志（志）
す（す）ま（ま）す（す）ん（ん）が（が）あ（あ）一（いち）雷（らい）が（が）し（し）も（も）能（ね）守（しゅ）が（が）有（あ）り（り）大（だい）丈（じやう）丈（じやう）入（い）る（る）
お（お）づ（づ）え（え）お（お）の（の）す（す）と（と）の（の）あ（あ）の（の）ふ（ふ）若（わ）人（にん）悪（あく）人（にん）の（の）差（さ）別（べつ）ゆ（ゆ）ま（ま）
落（おち）る（る）の（の）さ（さ）げ（げ）れ（れ）ど（ど）兼（か）て（て）お（お）が（が）け（け）る（る）と（と）退（ひ）れ（れ）る（る）も（も）胆（おん）が（が）あ（あ）り（り）す（す）ん（ん）
とよ（とよ）甘（かん）馬（ば）喰（く）町（ちやう）の（の）西（せい）村（むら）屋（や）で（で）陶（たう）板（ばん）一（いち）と（と）雷（らい）除（ぞ）心（こ）得（とく）軒（けん）と（と）
ち（ち）の（の）あ（あ）り（り）さ（さ）る（る）さ（さ）る（る）

い（い）本（ほん）さ（さ）ら（ら）う（う）く（く）わ（わ）る（る）そ（そ）の（の）ま（ま）さ（さ）ん（ん）ま（ま）ま（ま）マ（マ）ヤ（ヤ）お（お）菊（きく）さ（さ）ん（ん）又（また）お（お）積（つ）の（の）
れ（れ）めん（めん）ど（ど）ヨ（ヨ）一（いち）ナ（ナ）セ（セ）エ（エ）一（いち）何（なに）ど（ど）う（う）を（を）う（う）み（み）お（お）顔（かほ）色（いろ）ど（ど）う（う）も（も）あ（あ）ら（ら）
物（もの）が（が）あ（あ）り（り）る（る）ら（ら）あ（あ）ら（ら）と（と）お（お）よ（よ）を（を）ま（ま）す（す）一（いち）イ（イ）エ（エ）ま（ま）よ（よ）い（い）て（て）ま（ま）せ（せ）ん（ん）
ヨ（ヨ）の（の）ば（ば）附（つ）お（お）花（はな）ハ（ハ）口（くち）ど（ど）と（と）用（よう）あ（あ）り（り）そ（そ）よ（よ）一（いち）お（お）づ（づ）え（え）れ（れ）く（く）ト（ト）ゆ（ゆ）ま（ま）か（か）
ら（ら）次（つぎ）の（の）間（ま）（初（はつ））と（と）赤（あか）ハ（ハ）幸（さち）助（すけ）と（と）お（お）菊（きく）さ（さ）ん（ん）む（む）し（し）ひ（ひ）一（いち）完（かん）あ（あ）ら（ら）
と（と）お（お）酒（さけ）と（と）お（お）よ（よ）り（り）で（で）る（る）の（の）う（う）一（いち）アイ（アイ）と（と）れ（れ）で（で）の（の）お（お）不（ふ）血（けつ）が（が）あ（あ）ら（ら）ん（ん）う（う）こ（こ）お（お）
も（も）一（いち）半（はん）分（ぶん）ま（ま）け（け）ま（ま）せ（せ）う（う）の（の）一（いち）アイ（アイ）と（と）ん（ん）ら（ら）た（た）ん（ん）を（を）ま（ま）せ（せ）う（う）一（いち）サ（サ）ア（ア）
上（う）ッ（ッ）く（く）お（お）よ（よ）り（り）一（いち）マ（マ）ア（ア）お（お）ま（ま）入（い）は（は）ぶ（ぶ）らん（らん）お（お）あ（あ）り（り）一（いち）マ（マ）ア（ア）く（く）お（お）ま（ま）入（い）さん（さん）

く〜それではいりや〜さうするは免さんト一口から
と呑で跡へ残まるとお菊のゆとり笑うひるがう顔く
欣ゆ幸助のからむさあうられぬ程迷ひけれど由程を
居る〜幸助お菊の跡は恨しんか人ご言〜何がエ〜口は
のやがることと知りまるとお菊さんや信を勝とれ
鉄し〜鉄は弁さんと夫婦はまるのるんのと物り情ら
し〜ト涙ぐんで居るお菊お花ある〜ラヤくなんごエおま
さん悲し〜その顔と〜さんご恨とられるものご何

と〜一熊さんとお菊さんと六年齢もてふと〜
の沢のありお菊造さんおそれがな〜私由さあ〜
随分よろら〜このを無理は此方が進〜
とあひひなさるの〜それい〜
のやご〜お菊さん〜
お菊さんがあるが〜とあ人の唾〜
お菊さん〜私由若且那〜
さんとさあ〜お菊さん〜

因果ゆゑごと申このま此幸このまなるりハ幸助おせんさんの見けん見けんでも神かみさあ
 の後のち知しせせゆのやま人とまゆまゆふるるれるのであひヨ
 亦また好すいこあ方かたとあるあり殺ころされさくさひ切きられありのあり有あり
 まけんヨト云いまがうか菊きく子こ不ふ盆ぼんとさー〇おみんみんでもまのまのまよよのよい
 あととありありあるありよよが菊きくさんさんが身み不ふ智ちてもまああままん
 さんさんああかりかりやあ人ひとと申いええれれををささせせすするるてていいままののまませ
 んんとと強つよく思おもはせせととててののゆゆめめああららるるててののああららるる
 妙たくたささげげととおお咄たししナナ随まがが通と所しよよりりややままののままははああららりりと
 一いここまま実じるるおお方かたががあありりののそそふふががねねエエららちちののああららぬぬかか子こととヨヨト
 か菊きくのの顔かほととてて世よ元もと念ねん一いササククおおつつぐぐくくいいかか咄たししみみ菊きくととあ
 りりややああかか花はなさんさんののままるる洒しや落らくののいいででささけけりりややアアココららりりががつつ
 めめドドレレクク湯ゆををああららくくままおおりりまませせううトトままくくゆゆくく彩さい見けん送そうき
 か菊きくかか花はなははささららるる情なさけ知しりり色いろののままおおままままままをを二に人にん中ちゆう中ちゆうをを
 子こ代しろりりけけてて結むすめめののああららいいととままびびままけけくく逢あいい夜よのの兼かみ言ご中ちゆう
 次つぎのの條じょうももららりりくくああららせせりり

第十回

跡あとも二人ふたりがささ向むかひひ一ひとお菊おきくさんお義よしの幸助さちすけさんと二ふた人の
由よしあやあやのヨよ「エえそんな事ことはござんせんヨよ」それそれでもお
もろもろののヨよ「ささうももろでもおの人の堅かんかんのうう私わたしが
たたととござるござるのあつてもおままおつてござんせん一ひとおままが惚おぼ
てお出いるさるさるるそれそれこそ幸助さちすけさんがいららう堅かんかんのところ
ても上う出い来きることがありまたあのう「エえくくぞぞくく」
幸さち子すけは堅かんかんの人ひとでござんすまヨよ「そそここを和わららふまるるが仲なの
役やく「ううづづるるよよててゆゆららヨよ実じつは甘あま七しちさんおままさんが執しやく

心こころせお残ありまたた一ひと抱かかりまてお出いるこうとぞんぞんととりりそそととままははりりまま一
「ヨよ一ひとエえくく私わたしハハ元もと来きた実じつのお兄あに「エえととどどつつててままるる」
そんなそんなことことををああつつ一ひとややどどののややそれそれよりよりうう子こ一ひとそれそれよよののううと
「エえ」そんなそんなことことよりよりううごごままをを幸助さちすけが私わたしををかかららののとと思おもつつて
それそれるるややおお一ひとととかかれれトト顔かほををああつつ「一ひと葉はののようようののおお子こど
それそれるるううととままよよととああつつ一ひとややれれががよよいいそそううああつつ子こ今いま有ありり満まん川がわ
の寮りやうの庭にわ一ひと見みままううああつつててああののまませせああつつてて一ひと
のままううととままののよよととままヨよ一ひとどどののどど「エえ」一ひと子こああつつとと

耳みみとあうみト耳みみよにああささてややげげ一一それそれでもそれそれいいごごも
 ままごととううちちぐぐりりそそふふようようちちづづつつばばかか花はないい心こころののどどろろ〜
 むむんんででももううととううががままるるををりりああるるととんんちち〜
 花はなとと出いるるのの林やしきとと心こころのの思おもいいととさされれががああるるとと着きのの又
 今いま又またよよ後あと葉は下したままかかららもも嬌うれ〜
 死しにに乱みだれれはは方かたのの辭ことば彼かれはは是こゝままるるううちちみみままるるはは又
 度たびもも大おほききのの綱つな〜
 地ちののまま死しやや縮ちぢみみ水みづののめめ死しははももこのこの裙すそのの下したままるるのの濱なみ

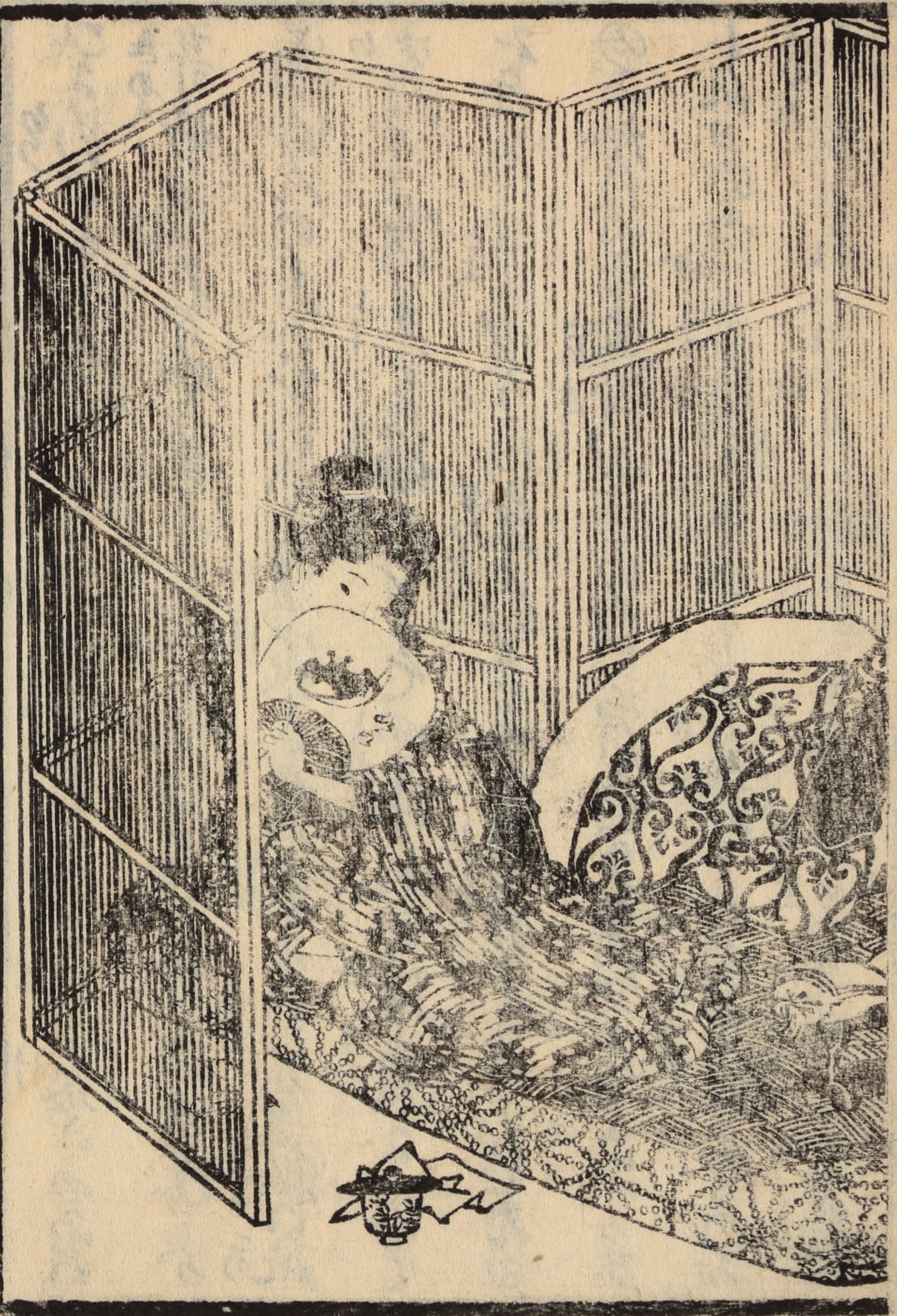
ちちりりめめんんののままままとと張はりのの柳やなぎ川がわがが画えのの野の菊きくののちちりり〜
 路みち考がうがが座ざ華げ〜
 帯おビととあありりのの帯おビととあありり〜
 下したままるるのの水みづ淺あし美みのの中なか〜
 船ふねととあありりのの船ふねととあありり〜
 浅あし川がわのの寮しやうへへ〜
 花はなとと乳う母ぼのの居ゐるる外ほかのの者もの〜
 別べつのの産うまま〜
 酒さけとと飲のむむ〜
 一一ホほニにおお菊きく〜

心よのとあふとまごか積つぐ女一それ由ゆむサア心成こ新造のの為ため
つげるのをどなきうてまてまりかか拵ぢづまのあをを一それサそれ
あのやがりまろてかか拵ぢづまのあをを一それサそれ
を後家さのの化くることとをえる一あり浦山の程また
で若く見えるヨあれで意地ぐろくねへと色田力の独のま
矢持ぐやさけれと一遠ねへお見世へ来くよ戯言を云ふ
司馬田さんとろの人を取持ぐやれバの一ナゼエ一あの人
の疎な酒と女か好でそとと違者で若の人と拵

びよ初めてもあの人をろの跡一残りといふらう後家さのあの
奇妙と一そのやアとよと信去清さんと善助さんがか
菊さんのおとといふと後家さのあのあとといふと私の此
家一廿七の年は嫁入と一と四年めは後家さのあとと
それらう豊豆がうの來人とまろて苦勞ならうとておも
のおなれでも大儀ととりとてなれさうのもねとサあつま
しヨのふ一若後家さのあとといふと私の此
大儀ととりとてなれさうのもねとサあつま

情せきふ迫せまつてお菊きく
 病やまとりつころ

けふはをれぬ松の
 ちきりつものや
 恋てふやまは
 名なのち
 たり
 りん

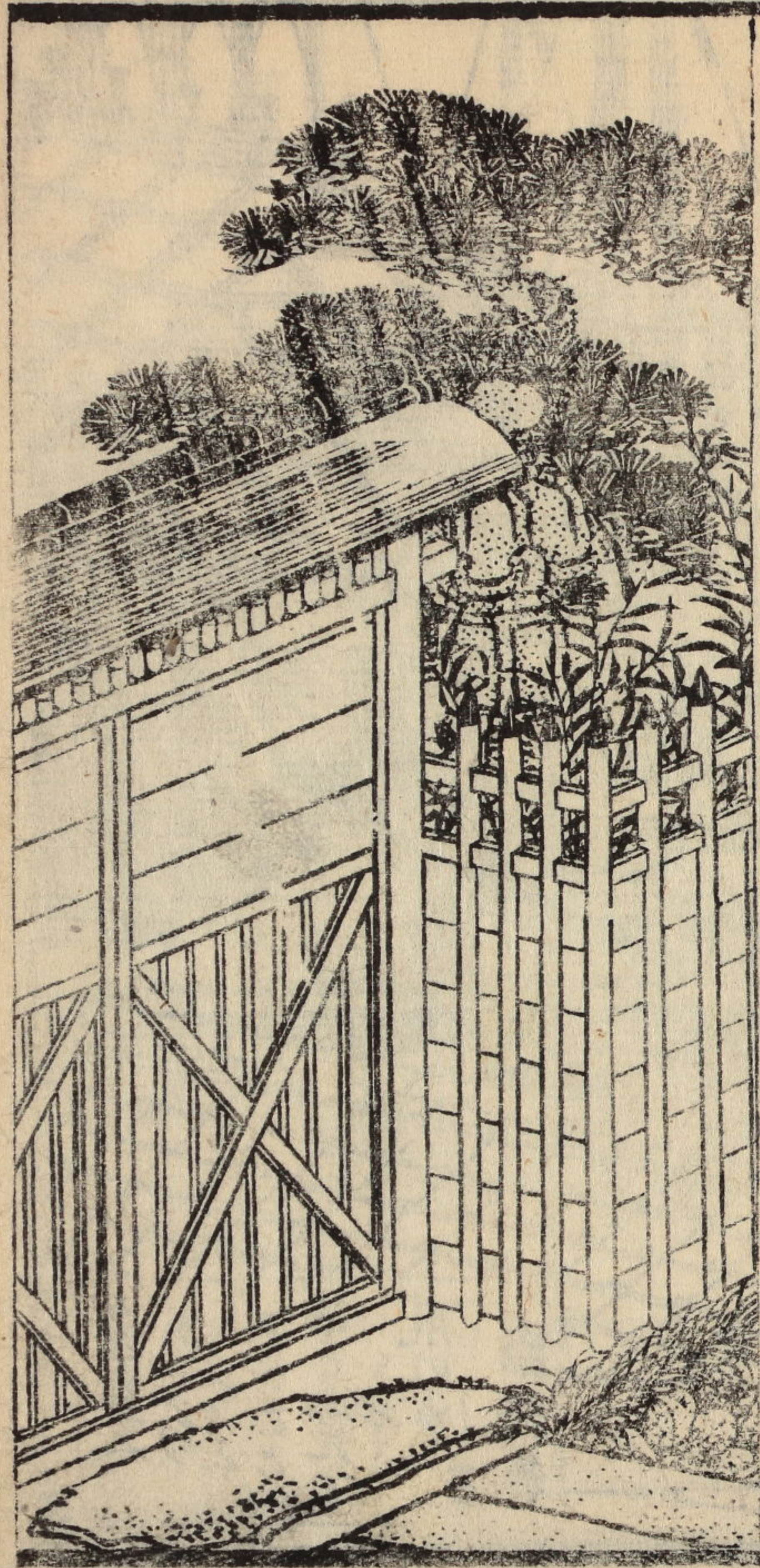


三十二どきけはくろくろく戻々ろくろくあるのどき偽助さんと
いちやくつ時分の憎らーわろこよばにトヤア仕方のの
幸坊どー女 せんがうでも有り幸助さんは惚て業
どのむろろせろー女 一そろエフコトヤアさるるろきまがつろ
まんごよそあどが惚るも無理トヤアね五分も透の
ね久徳男とハ幸助さんのあどごらふ一そよサどれでも
布まるのサト唱中ハ幸助ハ宮土橋まで用とろーハ
釣てぬり一幸 ぶぶおま入たあハナセ酒でものまね入のど

けふ今日ハつとろーがあどろろろ何でも好るもの山云は
やんるナ一妹ハ嫉ハのねエそのおれよ一まんぞあられ
ハイ由新造さんと色よさとりおて上ませう一まごそん
る幸隣をのよよこれゆくはがろろのせぶろあめ入とあが
そんるあどをのよとハ新造さんかうろーんろろあんとよ
ふおれが惚れて居るやろハ新造さんハ推がはとん
とあられくもこりんそんるよとととるさんハ一アレかま
男ハろろろケノとろり心の内でのらやろろろろ口のよとん

ていわれどこのラ後家さるでも女衆衆でもられるら
どヨ一わりぐて親もねへふせりばるさん一イエやん
此新造がかうさうらふ人一それゆよりサそれより已
あめへあみんる物と一サなく大變る世辞が始
つごころも晩よるまされねへやうよきをはけてお
トの野(乳母のけり)一幸助さんまごおごりま
く一す末てらさるま一こあつこのめごとのひさ
淡ざし(初)お花ハロと困りやうふし
て

るさ一幸さんうエをやく来ておられヨのそ強
く起つてやうと一井の茶と寄竹で持へと屏
風の中へ入る幸助さんこの病兼とみんなあま
へが煩のせるとさうとさう何でもよくしておられ大
事のお兼さんどううなんでも元のまありふしと
あが一整理あるとさうとさうして私よりよくさる
のうそとさうとさうが煩のせると余程よくお
私よ木竹トやアあるとさうとさうお兼さんの



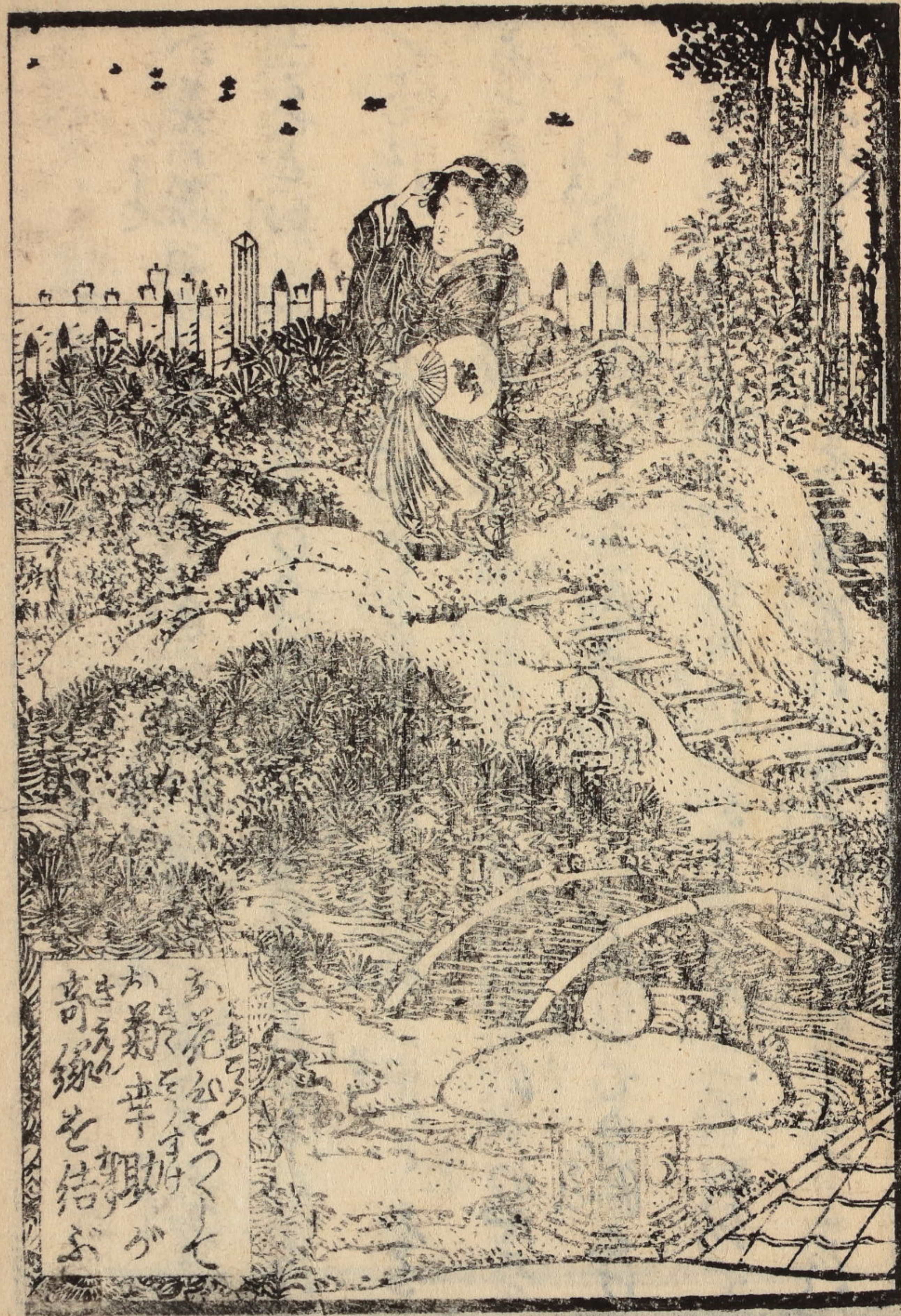
嘉吉 嘉吉

應喜名久舎 六の巻

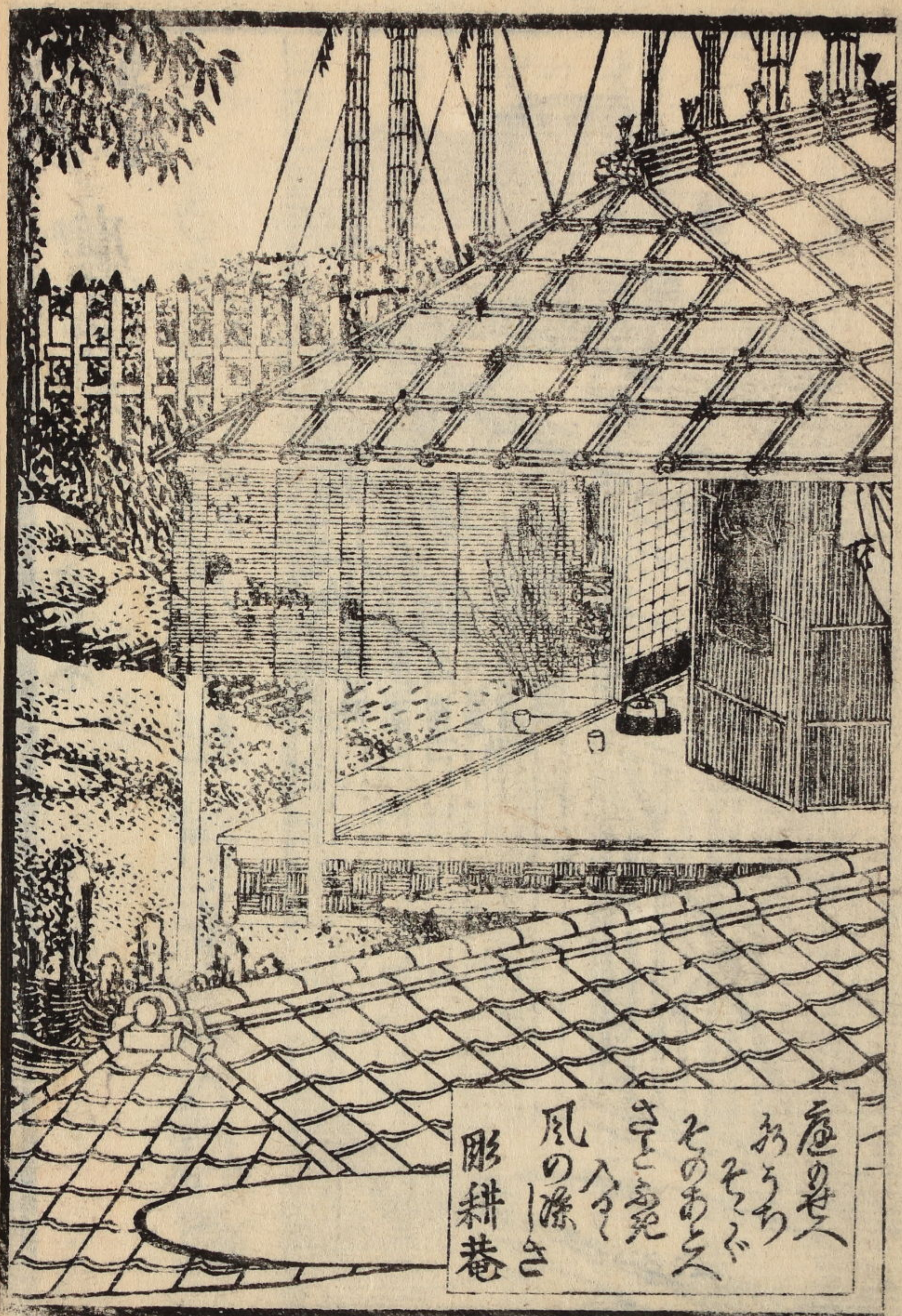
江戸 狂訓亭主人補綴



側小居ふらちりらく心のみごまるのを志つとこら
へてみぐるる葉を吐さば只ひ吐しての成先祖の
菊お菊さんのとあふそと争く結算とこのく
家成とあやうとまる所をよくあんながうくこと不
めくゆらふあやうまよません 一ツやあつらういざれ
かやゆほをのうとらふとさう入用意は持来りて葉を
お下女が持来されは花はさうと下あおた
めさうあばらうおいとあつらう下女一ハイあとの持たす人。



花のついでに
 お菊の幸か
 奇縁を結ぶ



庭のそと
 おうち
 そのあふ
 さとあふ
 風の漂
 彫耕菴

第十一回

お花の既まふ幸助こゝろを意いの直ちに引附ひきつけく一幸いちきやうさん私わたくしが中ちゆうさざと知しれまことごらふれどたとごの事ことふゆめられ
てもほろひおひどしてゆめお方かたと支助しすけは来きくをる
あとあらまんやうの出来でき来るものごおのまにがりなる
人と支助しすけふあつてをせんるよ面白おもしろいのがあつて由よし源げんとけ
られるのでいひのヨ何なんでも私わたくしがお菊きくさんよりあつて
けふハ世よひく殺ころまとも活いれよも所ところ付つけてあつてひやまに

ねエお菊きくさん一いちイマ何なんゆゆ私わたくしが身みのりるいので由よし
ごのまことを理りる預よとまきうより死してあまろご方かたがよふと
おんせのヨト起おこし上あり幸助きやうすけが死して来きて例れいよあきたる
願ねがひをさるよりを命いのち救すくはほ南無阿弥陀佛なむあみだぶつとご
が咽のど突つきけるよや幸助きやうすけの望のぞみうりしおとふれこれ
ハあつてせんごごとをこれ廿にお花はなさん止とめておえませへしを
ませんヨ心こゝろなくとあられるのたふしお花はなお止とめてことご
くまのびが死し方がまサ一いちアレお花はなさんまごが二に生なまうるよを

コレサ か菊さんおぼるんまア 幸おぼるヨ 幸「イエくうらちをて
かりて死しておられ 幸コレサく 幸「お菊さん身と捨てて
浮む 幸と申すやまのヨ 幸「お花さんなぜその申すや
申す 幸がうら 幸くても志くがな 幸いそれとも殺して 幸うら 幸アお
柔さんの 幸おひ 幸と 幸る 幸て 幸お 幸あ 幸げ 幸女 幸が 幸云 幸出 幸し 幸て 幸申 幸入 幸れ 幸れ
る 幸の 幸け 幸り 幸や 幸ア 幸た 幸れ 幸「 幸お 幸死 幸ぬ 幸柔 幸サ 幸ト 幸う 幸ね 幸て 幸ま 幸い 幸の 幸お 幸花 幸が
平 幸柔 幸お 幸菊 幸の 幸実 幸子 幸恥 幸く 幸ん 幸あ 幸と 幸今 幸あ 幸ら 幸う 幸ち 幸つ 幸け 幸ま 幸云
く 幸出 幸来 幸に 幸お 幸死 幸ぬ 幸覚 幸悟 幸り 幸く 幸ま 幸て 幸一 幸念 幸力 幸申 幸す 幸か 幸を

お花さん 幸「 幸一 幸美 幸知 幸さ 幸る 幸ら 幸う 幸ア 幸お 幸申 幸す 幸ト 幸服 幸を 幸着 幸て 幸さ 幸ら 幸や
お 幸納 幸め 幸の 幸ア 幸び 幸ら 幸の 幸「 幸一 幸そ 幸の 幸お 幸ら 幸り 幸せ 幸ば 幸お 幸菊 幸さん
と 幸治 幸し 幸て 幸お 幸り 幸ひ 幸ト 幸屏 幸風 幸を 幸引 幸く 幸庭 幸の 幸方 幸お 幸石 幸づ 幸て
お 幸見 幸睦 幸「 幸の 幸お 幸山 幸さ 幸て 幸幼 幸跡 幸ま 幸お 幸菊 幸の 幸娘 幸と 幸申 幸す
さ 幸幸 幸助 幸の 幸膝 幸を 幸顔 幸と 幸あ 幸て 幸く 幸あ 幸ら 幸居 幸る 幸「 幸お 幸菊 幸さん 幸お
実 幸ま 幸親 幸ま 幸で 幸お 幸り 幸く 幸ら 幸の 幸ま 幸い 幸ら 幸「 幸一 幸嘘 幸お 幸恥 幸く 幸ん
あ 幸と 幸が 幸お 幸花 幸さん 幸お 幸吐 幸さ 幸れる 幸の 幸久 幸「 幸あ 幸り 幸が 幸て 幸お 幸び 幸ら 幸ま
ま 幸それ 幸は 幸り 幸が 幸り 幸「 幸由 幸是 幸が 幸お 幸れ 幸ら 幸ら 幸「 幸お 幸花 幸さん 幸お 幸ら 幸く 幸然

さんとあんれとさせると成新造さんが拘束せざる
ごろうア、あまろこのめご一あまさんよ苦勞させたり人
あつろくいのせるのい出のけれと私をそてもお茶さんよ
添れぬ位るふか死んであまひま一それ程よまてあ
て下さりまらんからうざー私由命でもお茶さんゆゑろ
と思つてとります一うまをろり悟らん一死を
アあうはえろろん苦勞とさせるごらふとそれがま
案トられる一せん苦勞由私に焼く一アたまこれ

もたがひの悪縁ごらふトのひるごらあ海舟の幸助かまら
悦びはのりあひやゆるらんお茶のあまと幸助ははら
てお菊さんのか積がまらろ一お茶はあ（お菊さんと云送
幸助の出入方けお供で浅川へゆ由と宮土橋の吉買場よ
て信玄湯の旁（中）一其夜のあ花があ幸のたる
らひ千夜のちよめはさあおとも其は夜はそての
く東雲つぐる朝もあ幸助をそんと起（あま本店）
浅川よりゆり一はのりおせんとき度とる一又積でも

起らぬやうふるまふヨあこまきのち後くも来るくアイはアまとくか
待まト幸助とまらせらせら松元の様ら一さ司の中より続き
とりて幸助が前よりあまをそ警び負のあつれをあらるでやる
お菊が心の嫉しきらりつあらんあらくよ某中のあも
のこらるべー幸助の度うこらへく一さ衣をこらびきれ
しと待ち針の徳でがあま来てあらひ一サちくをあくりて
来ませう風でもあらぬやうふよくくけてあられヨ一生で夜が
のきらぬく道が案どられるやうでどぎらまんヨ一十二表
幸 お ま さ せ う 風 で も あ ら ぬ や う ふ よ く く け て あ ら れ ヨ 一 生 で 夜 が

くら船小をあまのくらトん湖のえん送る後朝の名跡を
丹波庭はどか花ハをあくも送り出て人は知りせぬ其事
實を知る人を知る情をけりけりさをまより若の同士
たらひま登る意の山名小らる程のあらるれは後承の
念念さらにとりさその身の意とえ向由せぬ情心子
とあら中あら憎た男のこらとあらりてそのあらり
三次次次牙牙の送之の亭主をれとあん礼をせぬ不義の
づら亡夫満左門との位牌を對しても所は亦さらぬ
あ ら 中 あ ら 憎 た 男 の こ ら と あ ら り て そ の あ ら り 三 次 次 次 牙 牙 の 送 之 の 亭 主 を れ と あ ん 礼 を せ ぬ 不 義 の づ ら 亡 夫 満 左 門 と の 位 牌 を 對 し て も 所 は 亦 さ ら ぬ

身み中の母とあるとりのあつち密通して親小取と与あま
へるおすめ娘そのま供まよきとやるとる信を清とぬ出よぶ
屋家やまイヤ信を清とのこれ是までしてても毛理ある中のごとく
大なること入捨ておたすこと此所お菊が身持幸助が
ふらちるうとるおん不埒奉公人の身分でたぬそれ仕方お菊もこのあ疎と
あはされもきぬあんまりつとてとるつけこらおまへりころく
初はつとわき下やが今うぬハそのかう小取とひのたゆるるも幸
助さき早々暇をきらつりのお云渡してとてさる信「ハイ

のこまうり「ことお後すたぬぐるりません後「ナセるるぬを
るこまをてとてと馬あつち鹿ぬさる「やうう「イとエさる「ていご
すまはぬが幸助ハ奉公人といやスの且ぬのおん送言「
條ちまを清ちとりのりかしてと辨によは家の生立同前たといか
菊きくさめと「小お茂がきしあとかあれがとて内外うちでもお
續つて五分でもうごうのぬの男おん徳次とくじ弁と家知目あは
送おん言ごんうぬ考あるぬいかその親おや徳助が大金を引ひまま返かへらる
らう志しさる宝屋の本家を根ねちをたぬのよと「大悪人お

あの子どりのくお菊さんあきふとまぬまどろつまどろ然次郎出入まどろ
もろぬ人それと且那えんの源者えん由縁くづら格別くづら不効えん弁えんと
よりまのそれく見れが幸助まあるて多あぬ大守まどろ此
人ままお菊まさるハ赤せの由新造ごあんさるまか信玄ま勝干
くれぐのお能少まつ不ま俣まがあれがとそ措までもさまこと
るのませんまそ不ま人まさるがらまつまやれがまま他親ま親と
お能ま漢まどままままんで女まとのままのりまやまののまごまそれま
ハ毎日まく信玄ま勝まといまごまあまごまままえまびま元ま來まおま猿まが里まの

まづ一ま武家ま中ま兄ま依ま源ま太まといまるまのまのまねまごまりままま
しま曲ま者まあまくまこれまままでま度ま々ま姉まをまゆまひまのまあまをまらまく
出入ませまぎまりまとま後ま家まハまらまやましまふま多まとま中まてま呼まよませ
武家まのま威ま光までまやまくまくまのませまけれまハま信ま玄ま勝ま由ま自ま
ふまゆまりま幸ま助まハまこれまままでま何ま事まもま持まぬまとまれまとまけま節まハ
子ま言まもまなくま病ま氣まといまひまとま引まこまのまりまおまるま由ま縁まおま菊
ハ出ま店まハま約ま々まおま花まがま方まふまままりまくま帰まらまびま中ま七まち
姉まとまあまりまハま朝ま夕まままをまはまけまくま大ま事まハまあまけまるま

後家と仇源をいせましく申すくひひ立さへ信
 去浦も一人あてふどり納免めくあまりたそた信
 折着より上方惣本家の大且那鎌倉見物の
 ためとくくたるぐくと下向あつて宝屋より着しけれ
 宝屋一當の別家出店不残集り近國近在
 の孫店ち米町を来りければ後家へはあつて
 しくまをぬぐちめをあつてける

第十二回



活そむる
 ゆりけ色よ
 おきくところも
 はれる
 花乃木をよみ

新吉原
 凡海老屋内
 江門

おきく
 新吉原
 花乃木
 活そむる
 江門

斯く信玄湯ハ京都の大旦那の爲時の考まを
くを承けければ以の外ふりきざり佐源太を
追入後家お猿ハ隠居所ふかこの豊次郎が乳
母の作畧あく後家と偽助が中は隠し子を産せ
里子よやりーあどまぐ取れ乳母のいとあを
内とあぐべぐむぐーくろりーが大造る身代を
今日まぐ取納りハ信玄湯一人の業る何
者とおれば此節病棄とく引込る幸助と

のろりと支配人信玄湯亦信玄湯の孫娘を花と
内々まぬよろりーは七がひを七ハは下りー
大旦那の三男ろり信玄湯とのひが実子は七の
大とゆゑ本家の旦那由うらび幸助が身元成
正一けるがハツの年信玄湯が八津の里より連下り
一とめて母助を助出ーはくぐと教うちるあ
助どのとうをドめく透まのハイありがふそんド
イヤたんく噂も噂まーがまはる子どもの時と親

のこよりるんを守りでものひりせるんが一へ成
程ハツのちこの地（信玄湯どのふつれてるるどめ
ひままと死大切ふりたせと里親を清取り一六
此守上の代家のりく度う取変す一が内ハそのまひ
包といひ及ハ世中もまされるべき金園錦の東夷後
大且ぬハむろろ一中と用けハ短冊ハ
君が代ふ光りをもそへくみどりふれ
さうえと見せよまのの神ぐれ

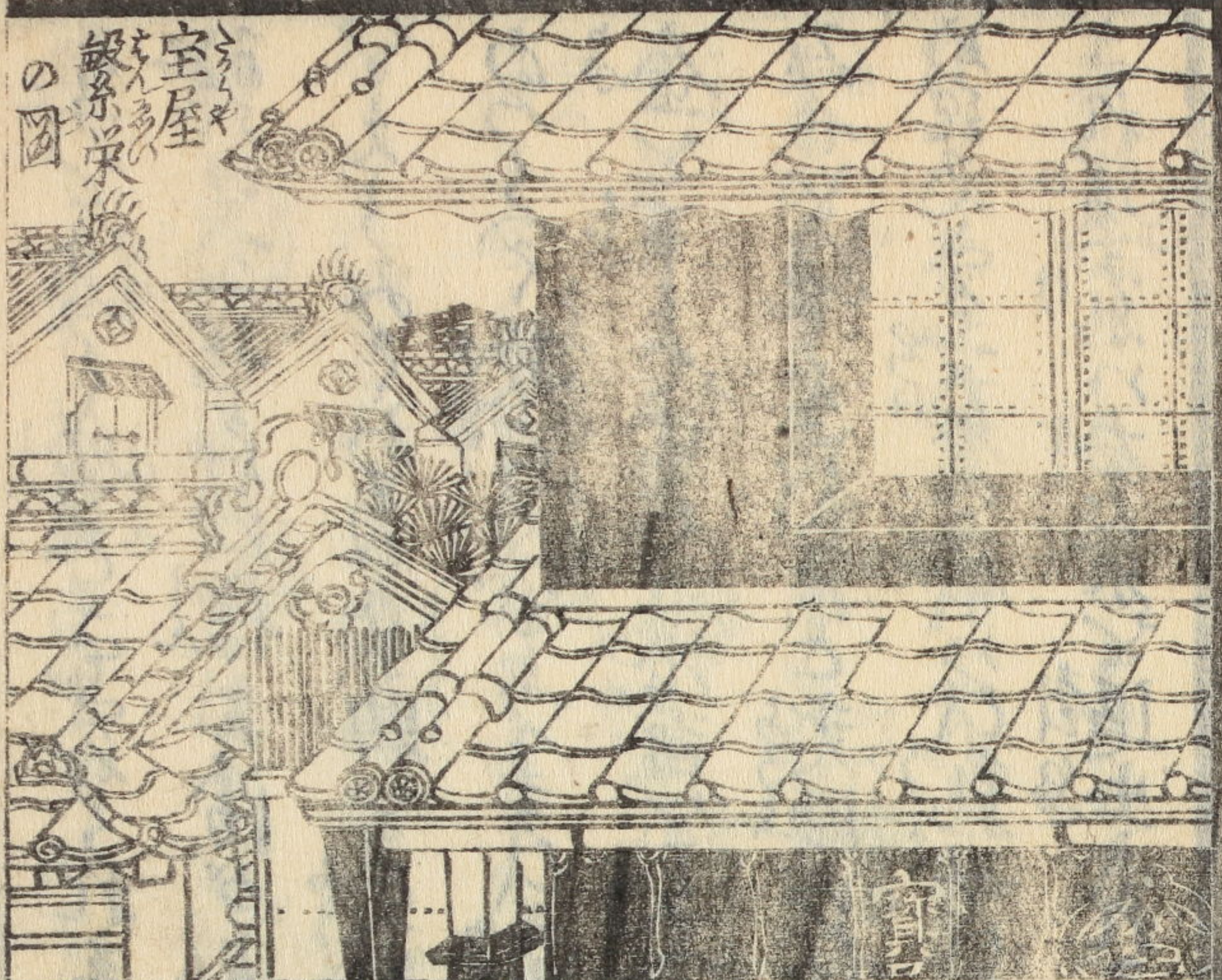
と一首のあは住吉の成守と添われハ大且那ハ神と
あぐ一ヤレくありける親子の対面一アケイ一アをど
ろくハおごイヤ信玄湯美さめハ一通りさのそ
されぬのいざせが三十年ハあぐき昔くろり
身も二十八九の年ふと廻りの女よんをどつはく懐
姫一なるそのゆうも女房ハアえきふるき生得也あひそ
ふ金子と添へくいとあををり家内ハ知らぬ取ら
らひも家の娘の女房といひ殊よ子供由二三人衆の

ためもと思案しつゝあせられど心の内もご生かすも
せぬ子されども親子の縁の有のめを自らえんばる母
のろともつらうあとの不便さま住吉の市神又願哉
獄のぞく守ふ此あせと添く女よ去ふくめ首尾
よく安産のうへるばその子守りをも樂へよと金匱
錦の家重代後々の脱扱あもと後入させしは
代衆その後やうもせたるひーは女ハ産後血のなや
とせらるるくまりく親里の住所も習りて仍承ハ知れ

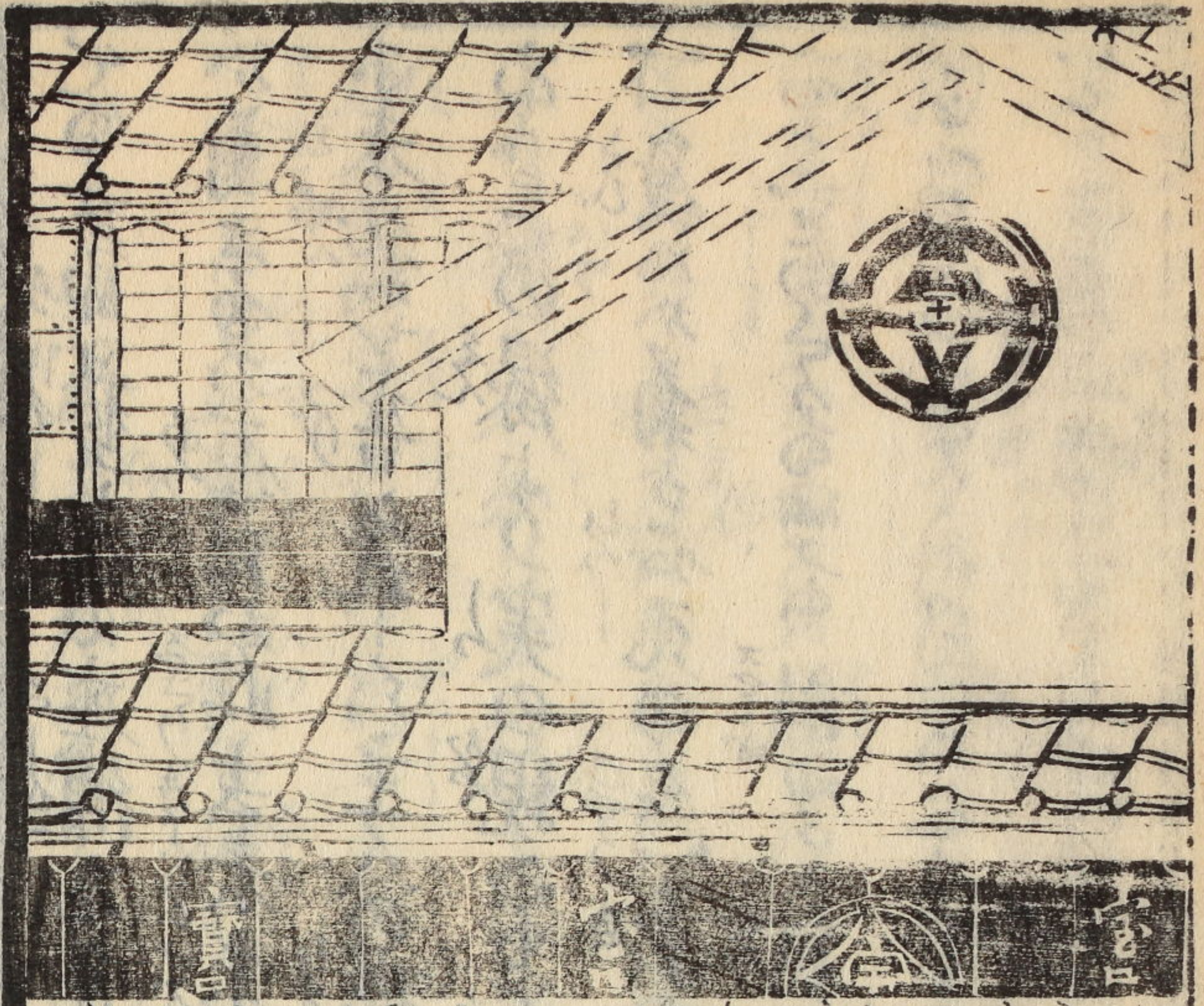
ままりて其方のあともどりきくよまかさんあはんと歎
きらうと高野山(日むい)と納め後世の吊りしは
たるがゆせハ奉養は未子惣願ハ今ハ家智日その
次ハ大坂の出店みまそれくハ身の片附しと首を
おつけその方があせとせし出ハ一先く居るるら
ハと年次はまのりハ今日をうらば由親子の對面
は七とのひ其の方をもみる信玄湯が生の此の世居ト
夢ておむろく信玄湯がよろこび泪も老の癖一まき

ふーぎる此物おもひがうりやめよりしてみるもくさるぬ幸
助さきの行まじとひ男おとこのりさもあるがらあるこの此
実子まことは七さると六腹はらがうりの此兄あに才さいさてもくトて
どうろう、幸さい縁えんのあきるはうりあり幸助さいちゆうの今日
生なまて親おやさへ知れぬ後あとしき身みと忠ちゆうひらせし今日けふの
今いま京きやうの本ほん家けの実子まこととハ夢ゆめの由よし知しるぬ親おやの教しゆ
一いち練れんふ日以ひ神かみふ初はつと何なにとを親おやの対たい面めんとと願ねがを
うけし二十にじゅう年来ねんあやしき方かたれお取とりのちよまあり

ても女め郎らう藝げい者しや由よし座ざ浦うらをり身み持もちせ居ゐるしこの所
か菊きくさゝの厚あつにむ勝かち去さ来き先生せんせいといふト者ものの各おの人ひと
小こ未み然ぜんと告つられし主人しゆじんの娘むすめとまぬまゝるべ死し相あひも
ありその縁えんより実まことの親おやも透あるくと示しされし事こと
下した度たびにか菊きくが必かならず死しの病びやう衆しゆの看かん病びやうまゝくこころを
このとどめくるも此こゝ中ちゆうに泪なみだあり、親おや子こ兄あに才さい名なのや透あるその
「ふつといとまてくふつといとまてく」死しの後のちに水みづか後のちをさうり
このいとのが柱はしらをさうりく此こゝ中ちゆうに息いきとほくは方かたの乳う母ははが



の上か菊幸助とまゐり
 して幸家と納めおとす
 申せと別家さむ本店の
 後見と一後家と然て
 へ行極の宿の出店の死
 たえらるゆへに
 をまきせを
 のちで
 後出店と申せ



知せまか菊がよ
 京の且ハ信玄
 後見と申面して
 食の一
 と幸家の家督
 めるれが
 去見と申面して
 よとあの

お子とありく嫁とさざめられまうと一と形ひければ大且
暇ひのよあふらば信玄湯がよろこび大くさるるべ吉日
とえうみくお菊幸助と丈ゆる青月喜料理を
あつらふ数百人とあるまひ京の本家上の数万両の
金と下と中七小北面と文へ金沢道お蔭造りの乃
みせとひらきお花と丈ゆのひろもお大を尺一さ
めれたる一家の娘ひ乳母のお菊が母のどく大のふ
され後家の本家を退出されり約徳の店へおられ然こ

弟と子ととておのろをぬくも天のちち退れぬ
むらひをせむひるけれされとお菊のやさしくも後母の心を
糸の毒よおひ糸の親且お孫會の如店中へ使く
考ひ弟よえ世と出させ約徳より後家をぬくとして同
居させ毎日お舞くまことの母のおとく大のりあてはら
りければさまの徳母ひよおとくお人とするりお菊幸
助と大切おひひつておつを代けるおあかのつらう世乃の
あつらふお代家さるとうやまわれりとをさそ幸助へ去

素先生らむせの元もと（多おほくの礼れいとありて一いつ家け敷せん昌せうのねがひ
 とろま誠つを尽つる家業けいごうの徳とく日々にちじつよさうさうそくそく子宝こぼうを
 あまあまここままふふけけ三ヶ津さんかづあるふ軒のき志しの宝屋たからやの生なま産うむ
 々々くくハハウウギギリリるる千代ちよ八千代やちよとさうえける

公羽こうう六の卷むく大尾おほびし

